

廣池千九郎と天理教本島支教会（三）

立木 教夫

目次

- 一 はじめに——本島支教会滞在の意義
- 二 モラルサイエンス研究の進展
- 三 本島支教会との出会い〔以上、56号に収録〕
- 四 本島支教会滞在の時期
- 五 大正八年春の滞在
- 六 大正八年夏から秋の滞在〔以上、58号に収録〕
- 七 大正九年春の滞在
- 八 大正九年夏から秋の滞在

キーワード…モラルサイエンス研究、天理教教理研究、天理教本島支教会、講習会、静養、片山好造会長

七 大正九年春の滞在

大正九年は、本島での定期的滞が始まって二年目、廣池千九郎、五十四歳の年である。この年の春の滞在は、二月九日から二月十九日までの十日間であり、講習会は、十日から十八日まで、途中二日間の休みを挿入して、実質七日間であった。

1 講習会

この講習会は、天理教本部で一月二十六日に行われた大祭に参加した本島部下の布教師を集めて行われたもので、内容は教理の研究であった。廣池は、布教に対する「奮闘主義」と「能率主義」の考え方を示し、教理の研究をした上で布教に臨む能率主義を推奨している。「天理教でも他の布教師は一月大祭後直ちに任地に帰って布教をしておるが、これは奮闘主義である。本島支教会部下の担任者ならびに授訓者等は、斯く一同に会して悠々と教理の研究をしておるが、どちらが利益であるか。奮闘主義よりいえば前者が善いかも知れぬが、能率主義よりいえば後者の方がどれだけ利益であるかわからない。」⁽¹⁾

このときの講演に関しては、直筆の「講演要旨」⁽²⁾と、「天理教本島支教会講習会に於ける 法学博士廣池千九郎先生講演筆記」（以下、「講演筆記1」と略す）が遺されている。まず「講演要旨」を取り上げ、次に「講演筆記1」を見ていくことにする。

(1) 「講演要旨」
日程と題目を抽出し、全体の構成を概観しておこう。

- 一〇日 「モラルサイエンスの必要と研究顛末」
- 一日 「階級制度の根本原理」
- 二日 「社会上、政治上、財産上の階級制度の合理」
- 三日 「デモクラシー、ソーシャリズムの不合理」
- 四日 「労働問題の誤謬」
- 七日 「予の入信」
- 八日 「たんのう」

各題目のもとに、取り上げる予定にしていた内容を追加すると、次のようになる。ここに午前と午後に分けてあるが、それぞれ二時間の講義が行われることになっていた。

- 一〇日の「モラルサイエンスの必要と研究顛末」は、タイトルのみ。
- 一日の「階級制度の根本原理」では、午前に、犯罪学、人類学、骨相学、遺伝学を、午後、「・老人尊敬の風——知識は経験也／・社会功勞者尊敬の風／・文明の起源」について講義する予定であった。
- 二日の「社会上、政治上、財産上の階級制度の合理」では、午前に、閥の起源及び合理、位階勳爵の起

源、政治の目的、専制よりも立憲、午後には、元老、枢府、上院、惣理、知徳と努力と財産との関係、原始時代の財産法等について。

一三日の「デモクラシー、ソーシャリズムの不合理」では、午前には、専制、立憲、デモクラシー、権利、デモクラシーの不合理、モップ、午後には、原始時代の合議制、財産制、平等、クロボトキンとマルクスの誤り等について。

一四日の「労働問題の誤謬」では、「予の運動研究の起源／・権利主義はだめ／・道徳主義は非科学的／・科学的に組織す／・大阪各地／・肺の虫と同じ／・道徳信仰のもののみ此世を支配す／・予の今後の運動」について。

一七日の「予の入信」では、「予の研究／・今後の運動」について。

一八日の「たんのう」については、タイトルのみ。

さらに、この「講演要旨」に続いて、道徳とは何々なりという形で簡潔に道徳を説明した、「道徳の解⁽³⁾」というメモが残されている。

(2) 「講演筆記1」

次に、この講習会の内容を記録した「講演筆記1」を見ていくことにする。このときの講演筆記には、「大正九年二月二十日／本島支教会長 片山好造」と日付と署名の入った「編序⁽⁴⁾」が付されている。この編序において片山会長は、廣池に講習会を依頼した理由を、「聖職を全うするには、道人の常に欠点とせる低級なる知能を啓発するの要あるを認めた」ためであるとし、その講義の筆記録を謄写印刷して配布するこ

とにしたから、「反覆誦読玩味しやうどくがんみし、もって知徳の向上つとに励め、教理宣伝いささかの遺憾なきを期せられんことを乞う」と、記している。廣池は、片山会長の熱意に応え、モラルサイエンスの研究成果をもって布教師の知識啓発、知徳向上、教理教育に取り組んだのである。

廣池直筆の「講演要旨」と本島支教会編の「講演筆記1」の内容を比較したところ、両者は正確に対応しているわけではないことが判明した。「講演筆記1」には内容上の区分が明示されていないので、「講演要旨」を参考にしながら、目次を作成しておくことにする。⁽³⁾

- 一 「モラルサイエンスの必要と研究顛末」
- 二 「階級制度の根本原理」
- 三 「社会上、政治上、財産上の階級制度の合理」
- 四 「デモクラシー、ソーシャリズムの不合理」
- 五 「近世思想近世文明」
- 六 「真理と大勢、正義と犠牲、慈悲」
- 七 「予の入信」

先の「講演要旨」と比べると、「五」「六」の部分が異なっている。この「講演筆記1」の目次に、内容的記述を部分的に補充してみることしよう。⁽⁶⁾

一 「モラルサイエンスの必要と研究顛末」

ここには「序論」というタイトルがつけられている。廣池は、「天理教を「社会の難問題を根本的に解決し、人類の病苦を救済し得る偉大なる宗教」であるとした上で、しかし、「今日までのような教理の説き方ではいかぬ」と明確に述べている。これからは、「教師の知識を増し、社会の進歩に伴わなければ」、「教祖の力説された真理を伝「える」ことは出来ない、「教理を科学的に解説するだけの知識を持つておらなければならぬ」と、しっかりとした教理研究の必要性を説き、布教師を激励している。そして、廣池は、自分が教理を科学的に研究していることを述べ、今回の講習会では、「私の道德学（モラルサイエンス）の一部」についてもお話しすると述べている。⁽⁷⁾

廣池は、モラルサイエンスを、「倫理を実行的に研究する学問」であるとも、道德行為と幸不幸の関係を「科学的に研究し……原因結果の理法を明らかにし……立証する」学問であるとも述べ、その展望と可能性を明確に説明した上で、⁽⁸⁾「天理教教師は……斯かる問題を研究せねばならぬ」⁽⁹⁾、「今日までの天理教教師は軽挙妄動であったために、神様の御急き込みであるのに拘わらず伝道上大層損をしておる。これからは時代の進歩に伴い、教理を科学的に研究して教師自身の能率を高めなければならぬ」⁽¹⁰⁾と説いた。

この後、従来道德と思われていたことに含まれる誤解や間違いを指摘し、丁寧に正していく。

(1) 従来道德と思うて行ってきたことが、最新道德に叶わないことがたくさんある

(a) 迷信の場合⁽¹¹⁾／(b) 労働問題⁽¹²⁾／(c) 肺病患者／(d) 同情、親切、憐憫、義侠は旧道德にして
真の道德にあらず／(e) 時勢と場所とに合せざる事は道德にあらず、ゆえに真理と道德に合せざるこ

とあり／＼（f）奮闘主義は道德にあらず、能率主義は道德に合す⁽¹³⁾

（2）自ら求めざるものは来らず⁽¹⁴⁾

（3）甲の原因は乙の結果を生ぜず、すなわち道德も万能力にあらず⁽¹⁵⁾

（4）人類の階級

（5）深き陰徳または大なる真理の実行は、その結果急に現れざるのみならず時に迫害を受くれど、その効果は偉大なり⁽¹⁶⁾

（6）精神の力は一切の肉体と運命とに関係するものなれば、真の慈悲真に基づける心事行為は一粒万倍なり

（7）因縁

道德に関する誤った考え方を正した上で、次に、天理教の「因縁説を学理の上より説明すれば左のごとくである⁽¹⁷⁾」として、当時の最新科学の成果を踏まえた「モラルサイエンス」の議論を展開している。この部分は、「講演要旨」の「二一日、「階級制度の根本原理」の「午前」で取り上げる予定にしていた内容と思われる。

二 「階級制度の根本原理」

（1）人間の成立

（a）「チエザレ・」ロンブアプロゾー氏（伊太利の医師）の説

- (b) エンリコ・フェルリ氏（伊太利の社会学者）の説
 - (2) 骨相学（フレノロジー）、性相学（フィジオグノミー）⁽¹⁸⁾
 - (3) 民法上の人格に関して精神病者は人格を認められず
- 結論

ここまでは、内容的に一つの大きなまとまりを示しているが、「講演要旨」と比較すると、複数日に互って講演することになっていった内容が盛り込まれている。

引き続き「講演要旨」の「二二日、「社会上、政治上、財産上の階級制度の合理」と「二三日、「デモクラシー、ソーシャリズムの不合理」に相当する内容が講義される。

三 「社会上、政治上、財産上の階級制度の合理」

(1) 階級制度の基本 / (2) 政治「の目的」 / (3) 労働問題

四 「デモクラシー、ソーシャリズムの不合理」

(1) 民本主義（デモクラシー、民主政治） / (2) 社会主義（ソーシャリズム） / (3) 唯物史観 / (4) 「相互扶助論」 / (5) サンジカリズム

次の二つの題目は、「講演要旨」には記されていない内容である。

五 「近世思想近世文明」

- (1) 近世哲学の影響
- (2) 科学の起源
- (3) 文化運動と世界の改造

- (a) 世界の大勢

- (b) 古代

- (c) 近世文明興隆時代

- (d) 現代及び将来

- (e) 立憲政体

- (f) 社会主義

六 「真理と大勢、正義と犠牲、慈悲」

- (1) 真理と大勢¹⁹⁾

- (2) 正義と犠牲

- (3) 慈悲

次の題目は「講演要旨」の「二七日 「子の入信」」に相当している。

七 「予の入信」⁽²⁰⁾

「講演要旨」と比較すると、「二四日 「労働問題の誤謬」と「一八日 「たんのう」」に相当する部分が見当たらないが、これらに関連する話題は、「講演筆記1」の随所で言及されていることから、分散して取り扱われたものと思われる。

廣池は、この講習会について、「今回、会長以下ますます感動」⁽²¹⁾と、モラルサイエンスの研究成果に基づく講義を行なって「感動」を呼び起こすことができたことを、『日記』に記している。

このときの本島滞在は十日間と短期であった。その理由は、「今回は飯降支庁長の依頼にて同地講演のためなり」⁽²²⁾とあるように、徳島教務支庁長飯降政甚の依頼により、高松市で民力涵養講演会を開くことになっていたのである。廣池は昨年十一月に、松村吉太郎幹事から、地方講演その他に関係することなく、本島で静養してよいという許可を与えられていたが、それにもかかわらず廣池は徳島教務支庁長の講演依頼を承諾している。ここには、人心開発救済の機会を最も大切に扱っていた廣池の姿勢が現れていると思われる。

2 モラルサイエンスの説明

当時、廣池は、モラルサイエンスをどのように説明していたのだろうか。先の「講演筆記1」では、「倫理を実行的に研究する学問は未だ世界にはない。ただ私の道德学（モラルサイエンス）あるのみである」と

述べていたが、モラルサイエンスと、宗教（特に天理教）、道德（徳に最高道德）との関係は、どのように説かれていたのだろうか。このような疑問に対し、本島の講習会の直後に行われた、引田の香川分教会で行なわれた講習会（二月二十八日、二十九日、三月一日と三日間行われた）のメモが参考となる。⁽²³⁾

一、モラル・サイエンスは、道德を実行するものは幸福あり、之を行わざるものは幸福なしと云う事と、又、之を実行しても幸福なきものあるは、其の所謂道德が、眞の道德にあらざる事と、道德の実行上に欠陥ある事とを科学的に説明するもの也。故にモラル・サイエンスの研究一たび成らば、世に道德を行わざるものなきに至り、世界の平和と人類の幸福は必ず期して到るべし。

一、一たび事、此れに至らば、すべての宗教と学校の徳育と、行政上の社会教育等、皆悉くモラル・サイエンスの証明によりて、其の説く所に權威を生じて、各宗教並びに学校其の他の徳育の効果立てるに現わるべし。

一、乍併、人間の助かる（生命、運命、人に慕わるる事を含む）と云う事は、普通の道德心と道德行為とのみにては不可能也。

一、故にモラル・サイエンスは、天祖、教祖の実行せる最高道德を科学的に証明す。

一、只今日の科学は今尚幼稚なるを以て、靈魂不滅（出直し）、若くは一粒万倍の陰徳の如き宇宙の最高真理に至りては、尚十二分に的確なる実証を与うる事能わず。

故にこの点は各人の理と神とを信ずる信仰心に訴うる外なし。

一、是を以て世界人類の宇宙の真理に対する最後の解釈は、宗教特に天理教による外なけれども、モラ

ル・サイエンスを採用せずんば、宗教も学校の徳育も今後の世界には用いられず。

一、是を以てモラル・サイエンスの職分を謙遜して、公平に云えば道徳と宗教とを、今後の人類に紹介する最良法は、モラル・サイエンスの外なき事と、今一つはモラル・サイエンスは或程度まで、人類を神に接近せしむる要具なり。随って今後の人類を平和、幸福に導く唯一の方法にして、如何なる科学も技術も方法も、人類の平和、幸福より見れば、モラル・サイ「エンス」の右に出ずるものなく。且つ又天理教の右に出ずるものなし。

要約しておこう。モラルサイエンスは、道徳実行の効果を科学的に説明し、徳育に権威をもたせることができる。しかし、「普通の道徳心や道徳行為」だけで、人間が救済されるようなことは不可能なので、さらに進んで最高道徳を科学的に説明した。ところが、今日の科学は未だ十分発達を遂げていないので、科学的に実証できないことがある。そこは各人の「理と神とを信ずる信仰心」に訴えざるを得ないのだが、「宇宙の真理に対する最後の解釈」は、宗教、特に天理教による外ない。しかし、モラルサイエンスを採用しなければ、宗教も、徳育も、将来用いられなくなってしまうだろう。ここには、廣池が、大正九年の時点で考えていた、モラルサイエンスと、道徳と宗教の関係が示されている。

3 静養

本島で十日間、高松で五日間、引田の香川分教会での三日間の講習会を行い、再び高松で二日間の講演と、ハードスケジュールで奔走するなか、廣池は体調を崩してしまった。大正九年三月八日の『日記』に

は、「夜より風邪」とある。このときの不調は長引き、『日記』では同年十一月二十八日に「決心」の記事が記されるまで、八ヶ月と二十日間に亘って、体調不良に関する記事が続いている。また、この「風邪」の状態が始まった直後に、廣池は大阪から本島に戻り、三月二十四日まで養生していたものと推定されている。

4 モラルサイエンスによる人心開発救済の構想

この病の期間に、廣池はモラルサイエンスについて、次のように『日記』に記している。「上流人士への宣伝中止のこと。かえてこれらの団体に同臭味と見られたる時には、真理を傷つくるに至るべければなり。／故にこの際、なお世を退避して、専らモラルサイエンスの研究に従事し、百世不易の真理を研鑽し、人類社会の平和幸福の基礎を確立のこと」⁽²⁴⁾、そして翌々日には、明治二十四年、廣池が二十五歳のときから採用してきたさまざまな治療法を列挙し、その効果を振り返って確認した治療歴を記し、「物質の効力は限りあること」、「最後の場合（暴動危急の場合とか、医師の見放したる重患、大病とかの場合）は、道徳のほかにたよるべきものなし。しかもそれはモラルサイエンスにていわゆる最高道徳たり」⁽²⁵⁾と結論を記している⁽²⁶⁾。そして、「モラルサイエンス完成の暁には、世界の人にも御道の人にも、同様に温かき心にて、すべてをこれにて救う心使いと計画をなすこと」⁽²⁷⁾とある。ここには、天理教の信仰をもっている「御道の人」も、また天理教の信仰をもたない「世界の人」も共に、宗教ではなく、モラルサイエンスと最高道徳によって開発救済したいという構想が表明されている。

八 大正九年夏から秋の滞在

このときの本島滞在は、七月十一日から九月十八日と、七十日間の長期に亘った。途中から、次女の富子も本島にやってきて、しばらく一緒に滞在することとなった。このとき富子は十八歳であった。

1 講習会

『日記』には講習会の記事はなく、「天理教本島支教会編輯」の「本島に於ける法字博士廣池千九郎先生講演筆記」（以下、「講演筆記2」と略す）に記された日付によりはじめて、七月二十二日から二十七日にかけて講習会が開催されていたことが判明した。毎日行われたのであれば、六日間の講習会ということになる。「講演筆記2」には目次がないので、内容を分析し、目次を作成しておくことにする。⁽²⁸⁾

- 一 開講の辞
- 二 布教師の心得
- 三 宗教と学問
- 四 宗教と道徳
- 五 天理教の教典
- 六 天理教の教理の特色
- 七 自然の法則

八 道徳

九 因縁

十 国家と天理教

講習会の内容を簡潔に要約しておくことにしよう。⁽²⁹⁾

一 開講の辞

「天理教は、社会の難問題を根本的に解決し、人類の病苦を救い、幸福を増進せしむる、偉大なる宗教である。今後の社会教育は、他宗教では駄目で、天理教でなければならぬ」、しかしこれまでのような教理の説き方ではない、これからは社会の進歩に伴って、教理を科学的に説明しなければならぬし、布教師は「自由自在」に教理を科学的に解説できるようにならなければならない。

「教校」を卒業した皆さんは、すぐにでも布教に出たいと思っておられるかもしれないが、まず教理を十分体得することが大切である、そうでなければ人を感動させることは出来ないとし、片山会長の依頼に応じて、実地布教において心得ておかなければならない教理のポイントを科学的にお話することになっているので、それをもって人心救済に努めてほしい、と開講の辞を述べた。

二 布教師の心得

布教上の心得として、社会の習慣作法の研究の大切さを指摘し、これに十分通じていないと人を開発する

ことは出来ないとしている。例の一として、「てんしゃく」という言葉を「天爵」ではなく、「天借」と誤解したまま布教していた人のエピソードを示し、「智能を啓発」することの必要性を示している。天爵を取り上げたあと、対比的に人爵という言葉の意味も簡潔に説明している。次に、例の二として、無理やり懺悔させたり、信仰させたりしようとする、布教方法はだめだと説明し、さらに、例の三として、「人の宅を訪問して書斎などに通された時にじろじろ室内を見回してぎよろぎよろする人があるが、こういう事は深く慎まねばならぬ」と、マナーについても注意している。

三 宗教と学問

宗教と学問は別のように思われてきたが、今は、宗教も学問的にきちんと言明できなければいけない、と述べている。

宗教における天啓の重要性を、「天啓がなければ宗教とは言われぬ。天啓に依らざる宗教は、信ずるの価値はない」と述べ、天啓による宗教として、天理教、キリスト教、仏教を挙げている。

哲学と科学の研究方法の違いを説明し、宗教はこれまで「丸呑みで可なり」とされてきたが、自分は天理教を科学的に研究してきた、その理由は、天理教には科学と一致したところがあるからだと言っている。

四 宗教と道徳

宗教と道徳の関係について、天理教を例に挙げ、「最高の道徳を尽くして神明をまつ」という「心事行為を実行」するので、はじめて宗教に価値が生まれるのだとしている。

五 天理教の教典

天理教の基礎となっている教典は、御古記、御筆先、御神樂歌、書留（御本席に天啓のあったもの）の四つであるとしている。

六 天理教の教理の特色

（1）進化論

教祖の教えは進化論と合致していることを説明した上で、人間に進化してはじめて、「幸福を自己一人に止めず、他に分配してやろう」という道徳的考えが起こり、これを「実行して心から「道徳の価値に」心服するようになった」と述べている。

（2）犠牲の観念と相互扶助および階級制度

道徳を行ってはじめ、生存競争は犠牲的生存競争となったとしている。ここに「犠牲」とは、「自己を本位とせず他を益する」観念であり、ここから「相互扶助」と「階級制度」が生まれ、「文明」が形成されることとなった。天理教の「互立て合い、助け合い」は、相互扶助そのものであるとしている。また政党間の争いに言及し、相互扶助の観念が必要だとコメントしている。

次に階級制度の起源は親孝行にあるとして、相互扶助、老人尊重の意義を明らかにしている。

（3）クロポトキンの平等主義を批判

階級制度を廃して平等主義にせよというクロポトキンの議論を取り上げ、これは真実の片面しか見てい

ない説だと批判した上で、天理教における相互扶助の展開の仕方を説いている。

(4) 順応同化、慈悲寛大、自己反省

教祖は、「低き優しき誠の人」の雛形であったことを述べている。

(5) 天理教は「善人をして益々善人たらしむる教え」であり、「道の模範者」をつくりだす

(6) 天理教は「ある一部分のものの利害を代表するもの」ではないから、主義ではない

(7) デモクラシー、多数決、平等主義の批判

七 自然の法則

天理、真理、天則、神道、天理はすべて「宇宙の法則」であると述べている。

(1) 正義

正義とは「中庸、衡平、権利、平均等であって……過不足なきこと」を意味する。皆、「正義」を得ようとして、つまり、「幸福」を得ようとして活動しており、社会主義も同様だが、「踏むべき順序」を誤っている。天理教は、「最高道徳を施して天命を俟つ」のであるから、正しい順序を踏んでいるとして、天理教から「最高道徳に依って国を治めんとする政治家」が出るようになってほしいと期待を述べている。

(2) 権利説

権利先在説、天賦人權説、帝王親権説を解説している。

(3) 義務先行説

遺伝学・生物学の知見をもって、教祖の因縁説を解説している。遺伝学をもって変化の可能性を示し、

生物学では、ウッズ (Frederick Adams Woods) の『王族における精神的・道徳的遺伝』 (*Mental and Moral Heredity in Royalty*, 1906) の研究を踏まえて、教祖の因縁説を、「祖先が智能を啓発し、徳器を成就し、自己を忘却して人を救い世を濟度し、広く徳を積みしものが代々重なって子孫に及ぼし、初めて是れ等の祖先の力に依って実現されたので」あって、例えば、「大臣となりしその者が一人にて是れだけの地位が出来た」と思うのとは「大なる相違」があるとしている。

義務先行説を解説し、義務の質と量に応じて権利が生ずるとして、「質が善良であって、量の大なるものがすなわち価値がある」と述べている。時局の話題である、普通選挙の可否について一言言及した後、債権者と債務者のたとえにより、権利と義務をわかりやすく解説している。

次に、積徳の重要性を、「人は道徳を行い重ねて初めて社会から認められるようになる」と述べた上で、社会主義に触れ、「社会主義の根本から誤れる点は、ここ」、つまり、積徳という手続きを経ずに一挙に「平等の権利を得んとする」ことにあるとし、対比的に、「日本の……皇室の尊きは、皇祖皇宗が徳を積み」たことにある、と述べている。

ここに「抜け」がある。

八 道徳

(1) 道徳にあらざるもの⁽³⁰⁾

(a) 迷信⁽³¹⁾

- (b) 政党は道徳にあらず主義に均し
 - (c) 同情、親切、義侠心等は真の道徳にあらず
 - (d) 世界の大勢
- 「大勢には善と悪とがある」が、しかし、「大勢に順応して道徳を行うものは、幸福を得られる」、また、「大勢に逆行すれば……時の政府の因^マれ^マとなり、処分を受くること」になる、と述べている。
- (e) 国民の輿論
 - (f) 公德心
 - (g) 質朴
- 「公德心は社会組織の智識に富めるもの」であるが、「道徳心」ではない。
- 「質朴は必ずしも道徳ではない」が、孔子が述べたように、「質朴は道徳に近い」。
- (2) 甲の原因は乙の結果を造らず
 - (3) 道徳を行っても求めざる結果は来たらず
 - (4) 如何なる真理にても時と場所とに適せざれば幸福なし
 - (5) 頼まれてなす事は道徳ではない

九 因縁

因縁を前世因縁と今世因縁に分け、前世因縁については遺伝と靈魂不滅、今世因縁については天然力（気

象風土等)、社会力、心使いについて説明している。

「天理教では遺伝というものは、その家族か血統のものに伝わるのである」とし、「因縁として祖先の心事行為が子孫に及ぼすという事は争うべからざる事実」だとして、このような点を捉えていることにおいて、「天理教は科学的に……説明の出来得るもののみで、今までの宗教と差のある点はここに在る」と指摘している。

前世因縁を説明するために、イタリアの精神病理学者で医師のロンブローツ (Cesare Lombroso, 1836-1909) が創始した犯罪人類学を踏まえて、「教理で言う因縁に依り現在の地位身分境遇と言うものが成立する」と説明し、次に、ウィーン(22)の医師のガル (Franz Joseph Gall, 1758-1828) が創始したフレノロジー (骨相学) に依拠しながら、「知覚神経と中枢神経が神様より自由を与えられたるもの」であり、これは教祖の言う「心一つは我れが理」を証明することになるとして、どのような地位身分境遇にある人でも、「心を立て替え即ちその人の心事行為により、自然にその組織が違ってきて善人に傾むく〔る〕事が出来る」と、論じている。⁽²²⁾

次に、ロンブローツの説に対する反対説としてイタリアの犯罪学者で社会学者のフェルリ (Enrico Ferri, 1856-1929) の議論が取り上げられている。フェルリは犯罪の原因は三つあり、「天然力 (氣象風土等)、社会力、ロンブローツの説の人類学」である。廣池はフェルリの議論を踏まえた上で、天理教は「他の宗教と異なり、自己の因縁を自覚し、慈悲寛大、自己反省して心を立て替え、忠誠努力而不要求の心事行為の下に徳を積んでいくのが、因縁断絶の方法である」と説くが、「天理教の尊き所は茲に存する」のだとしている。

十 国家と天理教

「今までの天理教の説き方は教祖の国家観念に存するところの根本から知覚した学者即ち教師に人物がなかったために、世に誤解を受けたのである」と明言した上で、国家の成立過程から「国家とは如何なるものか」を論じ、次に、「宗教の目的」を「神様の思し召しにより普く神意を伝えて、世の平和と人類の幸福を与えんとするのが目的である。いわゆる天理教はここに存するのである」とし、「我々は国家道徳に依って処して行くのである」と国家との関係を明示している。

天理教は、「防貧、防病機関というふうである」が、これも必要だが、「それよりも貧乏人や病人をつくらざることにするのが天理教の努むべきところである」という。カール・マルクス (Karl Marx, 1818-83) の唯物史観を解説し、「この世の中には神もない。肉体があつて精神即ち靈魂はないものであると言っておる。こういう主義が欧州で発展したならば、キリスト教の衰退と共に社会はめっちゃめっちゃになる」と警告している。

以上、「講演筆記②」の内容を概観してきたが、廣池は、このほかにも何回か講義を行なっていたようである。富子は次のように描写している。「父はたびたび本堂に大勢の人々を集めて講義をなさる。さわやかな声は健康のバロメーターである。幼稚な私の頭に少しばかりモラルサイエンスの概念が植え付けられている。／天理教祖さまの数々の人助けの事跡から説いて、自己を反省し相手に感謝するように、自我を慎み相手の立場を思いやるように、自分は陰になって人には花を持たせるようにと、ごく平凡な身近な例を示して諄々と話されるので、父の話はわかりやすく、皆肩が張らぬ。会長はじめ長尾幸太郎氏なども出席され、満足

そうに聞き入っておられる。」⁽³³⁾

2 「ほとんど絶息す」

廣池の体調は本島に来る前から悪かった。五月十一日に諸岡長藏氏に宛てた手紙の中で、「小生義、身上の都合にて渡鮮中止。これより六月中頃に入らば書籍携帯、本島へ移住・静養の考えに候。皮膚の神経、殊の外衰弱の由に付き、冷水まさつの出来るまでに皮膚をならす考えに候間、御安心成し下されたく候」⁽³⁴⁾と述べている。

不調のまま本島に到着し、十日以上経って多少健康が回復した頃から講習会が行われたことがわかる。⁽³⁵⁾

〔大正九年〕

七月十一日 本島へつく。三十七度二分くらい、数日つづく。たん、せき出ず。

七月十七日 少々よろし。

七月二十二日から二十七日

講習会

七月二十六日 せき込み甚だしく、窒息せんとす。今夜より、三日のお願いをなす。

七月二十七日 無事。夜、大せき込みほとんど絶息す。

西井医師を招き、神様をお願いをなす。のどより出血す。

廣池は、七月二十六日に、お茶を飲んで咳き込み、「窒息」しそうになり、二十七日には、「ほとんど絶息」してしまった。

3 絶息の意味づけ

廣池は、この絶息を「御手入れ⁽³⁶⁾」と受け止め、その意味を探り、次のように確定している⁽³⁷⁾。

(一) 大正九年七月二十七日夜半、突然私は非常の御手入れをいただきました。……二十八日の午前二時、即ち二十七の夜半過ぎに、咽喉から気管の辺が、急に苦しくなり目がさめ、それからせき入って息が絶えてしまいました。……その後、吸入などを致して、十数日養生は致しました。どうしても病んでいなかったように考えられます。そこで本島の役員方一同と、段々にその御手入れの理を研究さしていただきましたのです。

(二) そこでつまり咽喉気管は、人間の頭と胸との結び目であって、呼吸は死生を司る重要な作用であるのです。ここに御手入れのあったと云うのは、即ち私の精神に今一段誠、真実の籠もった、たんのうの理を納めて、御本部の理を今一層重く心に納めて、教理の研究をさしていただかねばならぬと云う事である、という事に決定致しました。

さらに廣池は、天理教本部入りの事情を回顧して、教理研究者として使命の重大さを改めて確認している。

それは何故かと申せば、皆様御承知の如くに、私は大正元年の御手入れの時、御道一条の事情を定め（十二月六日）、只今の撰行者、山沢先生の御助けにて助かり（十二月二十四日）、それから先管長様が、そんな事なら、本部に迎えるようにと云う事にて、只今の松村幹事殿を私の処（伊勢の勢山支教会）に御つかわしになって（十二月二十七日）、それから大正二年一月二十五日の夕方、私は始めて御膝下に、生涯の務め所としてかえらせていただいたのであります。

その時に、先管長様が御喜び下さって「自分は十六歳の時に、東京に遊学したいと、御教祖様に御願いを致しました処が、御教祖様が仰せられるには、いやお前は東京に学文に行く必要はない。学者の入る時は神様が学者を引き寄ると、仰せられましたので、自分はそのまま遊学を止めたのである。然るに今夜あなたが、御地場にかえられて、これから永く御道の上につとめて下さる事に為るかと思えば、先年御教祖様の御仰せに為りし事を、今更の如くに思い出します」としみじみ仰せられましたのであります。私はその時、有難き御詞に涙流れ声曇りて、何とも御返事も出来なかつたような次第であります。

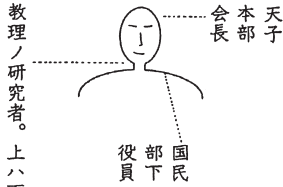
そこでどんな事がありましたしても、つまらぬながらどこまでも、御本部の御用をつとめ、世界助けの為に、一身を捧げさしてただこうと決心して居り、どんな事も自分の力でなく、神様、御教祖様は勿論、御本部の御蔭であると云う事を思わせていただいて、今日までその心持にて、専心教理の研究をさしていただいて居りますのですが、しかし熟々考えて見れば、世界助けの根本義に就いては、まだまだ私如きものの一通り二通りの誠位で、之を世界に徹底させることは出来ぬのでありますから、更に更に、深い深いたんのう、真の誠にて、真実に御本部の理を重んじて行くと云う私の大決心を、神様が促

して下さって、此現代に於ける全世界の大紛擾、大混乱を覚醒指導するに足るべき実行の伴うた、云い
 變うれば生命のある、真に実の入った教理を、世界に発表させようと云う御心に相違ないとさとらせて
 いただいたのであります。

筆者は、この引用文における最後の一文を読んで、強い印象を得た。この文章は、非常に息が長く、「更に
 更に」「深い深い」といった形で形容詞を二重重ねて用い、神の「御手入れ」に感謝しつつ、まごころを込
 めて教理研究の高い目標を担う覚悟を表明した文章である。ここには、廣池が「絶息」を手がかりとして、
 神の心を推し量り、その意味を確定した内容が記されているのである。

4 誓いとその意義

このとき、廣池は次のような図を描いて自分の役割を明確にした。⁽³⁸⁾



教理ノ研究者。上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事ヲ教フルヒナ形ニナリマス。

この図には、「のど」を指して、「教理ノ研究者。上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事ヲ教フルヒナ形ニナリマス」との、誓いの言葉が記されている。この言葉は重要と思われるので、これを二つの部分、つまり、「教理ノ研究者」と、「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事ヲ教フルヒナ形ニナリマス」に分け、それぞれに込められた意味を考察しておくことにする。

(1) 「教理ノ研究者」

廣池は、初代管長により、教祖中山ミキ子が予言した学者として、天理教本部に迎えられた「教理ノ研究者」であった。それゆえ、廣池自身は、「私は天啓の教理の研究者として、神様がお引き寄せ下さったわけであります⁽³⁹⁾」と述べている。廣池は、「教理の研究者と申せば、中中責任の重いものであります」として、その理由を、「研究する人の心使い、誠の程度・分量次第にて、その研究した教理に人の助かる助からぬ理が籠^こるのでありますから、中中容易の事ではありません⁽⁴⁰⁾」とも、「私⁽⁴¹⁾がご本部の理を心の真から底から重く立つるので、私が助かり、世界が助かって行くわけになるのです。すなわち私の心一つの理にて、世界の人が上の人を立つる心使いの理の上に、軽重が出来てくるからです⁽⁴¹⁾」とも述べている。教理研究者の人間・道徳的力量が研究成果に反映するのであるから、ここに、廣池自身「ヒナ形」を目指さなければならぬ理由が存在しているのである。

(2) 「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事ヲ教フルヒナ形ニナリマス」

まず、この言葉の前半部、つまり、「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事」を考察し、それを踏まえて全体の

考察を行なうことにする。

筆者は、この「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事」という言葉は、後に確定された、「上は心を救うを主とし下は物を捧ぐるを主とす」という格言と関連があると推定している。この図では、上下を「天子」と「国民」、「本部」と「部下」、「会長」と「役員」といった対比でとらえているが、後の格言では、上は「伝統・準伝統」とし、下は「伝統・準伝統に属するところの人々」ととらえ、その間に存在していた最高道徳的な関係が消滅してしまった経緯を明らかにした上で、「今日伝統及び準伝統に立つ御方々においては、よくこの原理を御味わいくださいとされて、古代聖人の教訓を真面目に御実行さるるようにその精神生活の復興を行い、一方には、その下に立つ人々はすべてその上に立つ人の生活を羨まずに、よくこの最高道徳を聴取・体得且つ実行せられて、一方には、伝統の大恩を報じ、一方には、人心の開発に力を注ぎ、自己自身の運命を開拓するように願ひあげます」と述べている。

廣池は、この「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事」の後に、「ヲ教フルヒナ形ニナリマス」と誓いの言葉を記している。このときの「絶息」体験を得て、「まだまだ私如きものの一通り二通りの誠位で、之を世界に徹底させることは出来ぬ」と反省し、「上ハ下ヲ愛シ、下ハ上ニ従フ事ヲ教フルヒナ形ニナリマス」と誓ったのである。後に確定された「真理と人格と調和して併せ尊ぶ」という格言があるが、廣池はその説明において、「人間の道徳及び信仰を実現さする動力は、真理のみにては不十分であつて、必ず人格の力を要するのであります」と述べている。今回の「ヒナ形ニナリマス」という誓いは、まさにこの「人格の力」の体得を指す誓いであつた。

この誓いを廣池の生涯のパスベクティヴに位置づけてみると、その意味が明確となる。そこで、天理教

の教理研究およびモラルサイエンス研究との関係において、この誓いの今後の展開を見ておくことにしたい。

まず、天理教の教理研究である。廣池は、大正十三年四月二十三日に、年来の教理研究を完成し、本部に提出することになる。⁽⁴⁴⁾『日記』には、「帰本。多年研究の教理原稿を本部に奉呈す⁽⁴⁵⁾」とあり、さらに、「今回の教理は、御教祖様の御心と先管長様の御心が籠りてある⁽⁴⁶⁾」と明記されており、大正九年の時点で、「まだまだ私如きものの一通り二通りの誠位で、之を世界に徹底させることは出来ぬ」と感じていたレベルを抜けて出して、廣池自身、満足のいく研究成果として提出できたことがわかる。

次に、モラルサイエンス研究である。廣池は、例えば、大正十四年七月二十七日に、「今一段聖者とならずば、モラルサイエンスに生命なきこと」、「絶対信仰をなして撓^{たぶ}まず。必ずモラルサイエンスに極度の生命を与うること⁽⁴⁷⁾」と、自己の品性向上を誓っている。この「聖者とな⁽⁴⁸⁾る」努力は、「ヒナ形ニナリマス」という誓いの延長線上に位置づけられるものであり、さらにこの「聖者とな⁽⁴⁹⁾る」努力は、最晩年に至って明確化される「モラロジー伝統主体⁽⁴⁸⁾」や、「モラロジーの精神伝統⁽⁴⁹⁾」へとつながっていく。廣池は、「モラロジーの精神伝統と申すものは……国家伝統を始め奉り他の伝統に奉仕する事を教ふるが為に其存在を許されて居るもの⁽⁵⁰⁾」とも、「モラロジーの精神伝統の精神と行動とはすべて人間をして其国の伝統と家の伝統と物質生活の伝統との三伝統に至誠服従奉仕する事を教ふるに在るのです⁽⁵¹⁾」とも述べているが、ここに表現された「モラロジーの精神伝統」の役割は、先の図で「のど」の部分に位置づけられた「教理ノ研究者」の役割と同型であることがわかる。

以上、絶息の意味づけを、廣池の後の思想的展開と関連づけて考察を行った。

ここで再び、話を大正九年の本島滞在の時点に戻すことにしよう。

5 父半六の一年祭

八月九日の『日記』に「亡父一年祭。中津分教会のほか、本島にても行なう。子とトミ子、二人参列す」とある。このとき、廣池は、「父の写真を見て、かくのごとき体格になりて、事業も完成し快樂も得らるるようにしたし」とも、「父の容貌に鑑みてこれに劣るを得ず」とも記し、「一年祭の日より一切心の立てかえ」と「健康たてかえ」を「決心」した。しかし、この決心は、「大勇氣にて肉体の運動すること」とあるように、相当な覚悟を必要とする決断であつたことがわかる。廣池は、「神様に願ひ、養生して、十年あともどり」し、「心は二十七、八、肉体は四十四、五になりて、今後三十年以上間、活動さしていただ」きたいと祈願している。⁽⁵³⁾この頃の体重は、「十一貫五百」⁽⁵⁴⁾とあるから、四十三キログラムであつた。

6 モラルサイエンス研究

本島滞在直前の六月二十日に、廣池は、「研究」として、「筆記は「大正十年」一月より、本島講習の原稿作ることを手始めにすること」⁽⁵⁵⁾と記しており、本島での講習会の原稿作成がモラルサイエンスの執筆と直結していたことがわかる。本島滞在中の八月十一日の「治定」では、「本部へ御願ひすること」として、「モラルサイエンスの方針、ご説明申し上げ候こと」とあり、八月二十二日の「治定」のなかには、「大正十年よりモラルサイエンスに執筆のこと」⁽⁵⁶⁾と翌年からの執筆開始を誓い、「出来の上は、米国布教のこと」と海外布教を構想し、「モラルサイエンスの第二期までの計画を立て、海外布教のきそを立て」⁽⁵⁶⁾「^(基礎)」といった記述

から、モラルサイエンス研究が煮詰まってきたことがわかる。

この時期に書かれた直筆の講演要旨には、「魚、いせのいわし。三河のいわし。／百鍊の鉄、人を切る事、大根の如し。／相事伝鍛刀法。皮金と刃金を合わせし八百四十万七千四十枚程のハガネを折り重ねたるもの。／……／伊勢、如月、赤福。京、八ツ橋。／永くたき込みしものはくさらず」といった内容のものがある。これは後に、『論文』の第十四章第十三項「因習的道德は利己主義のためにのみ苦勞し、最高道德は自己の保存及び發達のためのほか更に人心の開発もしくは救済のために苦勞す」に結実する内容である。

7 片山会長のアドヴァイス

廣池は、この時期、連続的に、「御願ひ」、「誓ひ」、「決心」、「治定」を行なっている。八月十一日には、「本部へ御願ひすること」として、「大祭の時、帰本中、二十一日より二十七日まで、右の御用仰せ付けられたく候こと。(1)別席の番号札渡し。別席所の昼間（正午休み中）の掃除。静座法にて、半睡状態にて別席につむること。／(2)下足を直すこと。／(3)朝夕御つとめ、参拝、そのまま勤むること。／(4)本部役員方の便所に行く時、手水をかかすること。／(5)面会はすべて夜間のこと」と列挙している。

廣池のこの決心に対し、片山会長は、「但し道具各々異なるゆえに、右の心使いをすれば可なり」というアドヴァイスを行なったのである。⁽⁵⁹⁾

8 本島での生活

富子が本島に到着した日は不明（八月九日にはすでに本島に来ていた）であるが、九月十八日まで本島に

滞在し、その後、高松支教会、屋島に同行し、九月二十三日に帰路についている。富子は、この約一カ月半に亙る廣池の日常生活の一端を記録していた。ここでそのいくつかを見ておくことにしよう。

(1) 身の回りの世話

本島での生活では、誰が廣池の身の回りの世話をしていたのだろうか。富子は、「片山会長ご一家の行き届いたご配慮には、心から感謝申し上げます」として、次のように記している。

「中年のご婦人が二、三人付ききりのうえに、実直な青年が三人、交代で不寝番を務め、夜半いかなる用たしにも至誠をもって父に奉仕されていた。筆、紙、墨には不自由なく、すずりには常に墨汁が満たされ、書き損じた原稿、清書する原稿、清書した原稿のまとめ、分類など私より早く、そして私がこよりをよるよりもっと手早く上手によられたこよりは、すでに束にしてたくわえられていた。⁽⁶⁰⁾」

お付きの婦人は、川村ツル、永山ふくえ、浅野とめ、青年は、藤山春之助、岩橋健太郎、岡崎、向所といった方々の名前が伝えられている。⁽⁶¹⁾

片山会長の娘婿である藤山氏は、「私が博士の小間使いを……受け持っていました。……私の小間使いは、丸亀、下津井へ走り使いをするのが主な仕事でした。……そのような中に私は廣池博士からいろいろとお仕込みを頂き、また物を見せていただきました。従って一番長く直々に先生に接近していたのです⁽⁶²⁾」と、インタヴューに答えている。

また、岩橋氏は、「大正九年に咳の出たときには、会長は特に心を尽くして、大阪からスッポンを、下関からフグを取り寄せた。これは博士の要請によるもので、体に精力をつけるためであった。スッポンを殺す

のは岩橋の仕事であつた⁽⁶³⁾と回顧し、不寝番についても、「廣池博士は」昼夜なしに勉強され、従つて先生は昼間でも休むことがあつた。そこで側近の者は、「先生は昼間寝られるが、私たちはそうはいかぬ」と言つて嫌がつたことがあつたが、それを聞いた「博士は、ご自身のわがままを側近者に教えてもらつたと喜んでおられた。博士について感心する事は、決して高ぶるところのないことである。若い者に対しても学者風は決して吹かせない。そして何事によらず後味の悪いものは残さなかつた」と、廣池の人物を語つて⁽⁶⁴⁾いる。

(2) 食事

食事について富子は、「父は私と食事するとき、とても陽気で、これはうまい、これはうまい、と目を細くして喜ばれた⁽⁶⁵⁾」と記している。食事は朝昼晩と、片山会長夫人はると片山いま（はるの母）の二人が調理し、「ほとんどがお粥。副食物は滋養のあるもの、魚は焼いたもの、後には島の習慣に従つて煮た物も召し上がった、自身の魚が主であつた⁽⁶⁶⁾」という。

片山いまは、本島支教会が大きくなるにつれ、「炊事の切り盛り一切を引き受け働きつづけてきた」人である。また、「イマ婆さんは料理がとても上手で、村に何かあるとその都度たのまれて出掛けたものでした」とも、「いつ、なんどき人が来てもお婆さんは、コンコだけでごはんを食べさせるようなことは決してしませんでした。ひごろから魚を干して保管したり野菜を添えて食べられるように気づかひしてくれました⁽⁶⁷⁾」といった、逸話も残されている。

(3) 舟遊び

前年の七月二十四日の『日記』にも「舟遊び」という記述があったが、そのときの様子もおそらくこのときとそう変わらないものであったと思われる。

「月が出はじめると、会長のお心尽くしで舟遊びが催される。父はセルのひとえにセルのはかまをはいて、インバネスに身を包み、ニコニコして舟に乗る。月は中天に昇ってますますさえわたり、金波銀波の上に舟はすべり出し、美しい岩と岩との間に舟をとめる。ぎいっぎいっと櫓をこぐ音、ばさんばさんと舟端を打つ音、月光は岩根まで透かせて、海底には龍宮城でもあるような。舟は寄り合って、皆静かに波の音を聞く。

父は中津の海を思い出すかのように、「やりはさびでも名はさびぬ」と美しい声を流す。と、まわりの舟から明るいかけ声と拍手が起る。役員さん信徒さんたちが次々とお国自慢のどを聞かせて楽しい。本島は韓国と親交厚く、鴨緑江節が盛んであった。鴨緑江節の終わりには、「道徳科学、アリア、モラルサイエンス」と必ず結ばれるので、父も会長もニコニコされる。⁽⁶⁸⁾

廣池が心を開き、本島の人たちと和やかに交流している様子が生き生きと描き出されている。

(4) モラルサイエンス研究

廣池は富子に、「いまにいい本ができるぞ！ モラルサイエンスじゃ。いい本ができるぞ！」と語ったという。研究の様子については、「静かに読書されることで平穩無事な日」が過ぎていく間に、「父の原稿のふろしき包みはいつの間にか増加していく」とある。⁽⁷⁰⁾ 八月半ば過ぎの頃は、「父は落ち着いて「生と死」について著述中であつた」と記されている。この「生と死」に関する著述とはどのようなものであつたのだろうか

か。

(5) 人心救済

本島での人心救済の様子も次のように描かれている。

「本島支教会には、韓国、九州、四国、本州からたくさんの人々が毎日舟で来られる。私は健康のために、教会の皆さんといっしょに一日一回は必ず舟着き場まで送り迎えに歩いた。親元へ帰ってくるかのように、病む人、痛む人、苦しむ人たちがいたわり合いつつこの島に集まってこられる。恩師先輩はわが子を迎えるように、手を広げて待ちかまえ、温かい心で包容して教会の門をくぐらせる。さまざまな因縁を抱えて苦しみ嘆いて来た人たちが、やがて一週間、十日とたつうちに心身の健全を取り戻して、喜び勇んで離島する様子を見て、私は、この本島は心の宝島であると思った。父はそれらの人々に手を差し伸べて導き、励ましておられる。尊いお仕事だと思った。」⁽¹⁾

この後、富子は大坂経由で東京に帰り、廣池は九月二十七日から十月十八日まで山陰地方の巡回講演に出かけ、十月二十一日に天理教本部に帰り、十月二十九日に帰京の途についた。東京に戻ってから発熱が続き、再び、「息とまる」⁽²⁾という事態に陥ったが、このときは大事に至らなかった。

注

(1) 「天理教本島支教会講習会に於ける 法学博士廣池千九

郎先生講演筆記」(以下、「講演筆記1」と略す)七ページ。句読点を補った。

(2) 「遺稿」。

(3) 「遺稿」。この「道徳の解」がどの題目のもとで使われたのかは不明であるが、内容的に興味深いので、ここに示しておくことにする。

「道徳の解

(一)道徳とは自分を犠牲にして、人を喜ばせ、世を益するることなり。

只自分丈損をするは道徳にあらず。又、正義を守りて譲らざる心事行為及び偏頗の心事行為は道徳にあらず。

(二)道徳とは時勢と場所とを益する為に、真理を実行する事也。

故に時と場処とに合せざる真理を行う時には迫害を受く。

迫害を受けても世の為になる事をしておきたしと望みて努力するものを、聖人、偉人と云う。これ己を犠牲にして世を益する大なるものなれば也。

(三)道徳とは、神の理想たる世界の平和と、人類の幸福とを増進する事に努力する心事と行為と也。

乍併、時と場処とに依じて其の実行の方法を異にす。故に今日の国家時代には、国家の安寧、秩序、国民の幸福を増進する事が道徳にして、之に反する心事行為は、たとい真理には合するも道徳にはあらず。犠牲に為りても犬死となるべし。」

(4) 「講演筆記1」の「編序」。引用に際して、多くの箇所

において旧漢字を常用漢字に改め、カタカナ表記をひらがな表記に改め、句読点と段落を加えた。

「今期当教会開催の講習会において、前後十有余日に涉りて法学博士廣池千九郎先生の熱誠なる講演を聴き、おおいに時代思想に関する知識を得たるは、諸君と共に深く感謝するところなり。

その所論概(おおむ)ね博士の独立的性格と深遠なる思想とをもつて、諸科学の原理を根拠として、帰納的に研究されつつある道徳学の一部を紹介せられたるに止まるも、それに依「り」て、吾人は未知の真理ならびに最新科学がますます斯道教理に接近し来るを知り、現時世界各国に涉りて紛糾せる社会問題、労働問題、人生問題等の解決は、吾人道を奉ずるものの最大使命なるを思うと共に、その聖職を全うするには、道人の常に欠点とせる低級なる知能を啓発するの要あるを認めたり。

しこうして博士多年の期待もまたここにあるを知れり。幸いに聴講者諸君は充分その意義の諒解に励(つと)め、勇氣と確信とをもつて、思想混乱せる群衆教育のために計るところなかるべからず。

これ吾人が国家ならびに斯道の興隆に貢献する最大の任務にして、また博士の厚意に酬ゆる最善の方法たることを信じ、ここに聴講筆記を謄写し敢(あ)えて頒布する所以

(ゆえん) なり。

しかるに従米配布したりし筆記類は多くは、精読せずし
ていたずらに机上に堆積しある傾きなしとせず。かくては
吾人の素志に反すること甚大なり。読者もしこの点に關し
て吾人の国家並びに斯道に対する赤心を諒解しおらば「読
書百回自(おのずか)らその意に通ず」の格言を思い、反
覆誦読玩味(しょうどくがんみ)し、もつて知徳の向上に
励め、教理宣伝上いささかの遺憾なきを期せられんことを
乞うと爾云(しかい)う。」

(5) 「一」で示したものが、「講演要旨」の項目に対応する
内容であり、「二」で示したものが、「講演要旨」の項目
には対応しない内容である。また、項や節等の番号は、
一、二、三…、(1)、(2)…、(a)、(b)、(c)
…とした。

(6) 「講演筆記1」からの引用は現代仮名遣いに改め、適
宜、句読点、段落等を加えた。

(7) 「序論／現代文明の欠陥は、人類の病苦である。生理
的の生活をなす人間が、常に病氣のために苦しんでいるの
は何のためであろうか。すなわちその病氣は何によつて起
こるか。時代が生む悪思想のために感化されて、いわゆる
日々の心遣い悪しきがためである。…これを救済し得る
ものは天理教である。

しかし天理教はかくのごとき社会の難問題を根本的に解

決し、人類の病苦を救済し得る偉大なる宗教ではあるが、
今日までのような教理の説き方ではいかぬ。言を換えて申
せば、教祖の力説された真理を伝うるには、どうしても教
師の知識を増し、社会の進歩に伴わなければならぬ。すな
わち、教理を科学的に解説するだけの知識を持つておらな
ければならぬ。腹の空いた時は飯を喰えば腹が大きくなる
というような解き方では、神様の御急(せ)き込みである
にもかかわらず、助け一条が遅れる。

私(廣池博士 以下同じ)も、明治四十二年に入信して
漸次教理を聞いて今日に及んだが、やはりはじめは空腹な
るときは飯を喰えばよくなるというくらいのこと、別に
理屈が解つて入つたわけではないけれども、これを科学的
に解説することができれば各階級皆信じるようになる。私
は豊前の進修学館にある二十四万巻の和漢洋の書籍を修
め、その後伊勢の神宮古事類苑その他で数十万巻の書籍を
渉猟した知識をもつて天理教の教理を科学的に研究してい
る…。しかし教理を科学的に説明するというでも別に難
事ではない。

従来世間に行われている倫理学(エシックス)は道德の
理屈を論ずる科学である。そこで倫理を実行するのが道德
といい、実行するまでは倫理である。しかし、倫理を実行
的に研究する学問は未だ世界にはない。ただ私の道德学
(モラルサイエンス)あるのみである。今回は因縁の話

するつもりであるが、その前提として私の道徳学の一部をお話しておこうと思います。」〔講演筆記1〕一―二ページ

(8) 「道徳を行うて終生不幸なる人がある。その一例を申せば、日本では楠正成、佐倉宗五郎などは、道徳を行つたけれども、あまり幸福ではなかった。支那では孔子の弟子の顔回が立派に道徳を行つたけれども終生貧乏で、三十歳で死亡した。しかるに一方、道徳を行わざる人に反つて幸福なる人の例を申せば、同じく支那の盜妬という人は悪人であるのに終生幸福であった。そこである人が孔子にその理由を尋ねたところが、孔子は科学の知識なくかつ因縁ということも知らないから答えに窮したが、これを天命なりと答えた。しかし、今日の人は、そんな答えでは承知しない。どうしても科学的に説明しなければならぬ。

科学というても、さほど値打ちのあるものではないが、今日は何事も科学的のものでなければ信用がない。彼の医師のごときも、昔は易学を基礎として、病人には薬を用ゆれば癒るといふ考えていたから、信用がなかったのであるが、それが漸次科学的に研究して、その原因結果の理法を明らかにし、これを立証することができるようになったから、現代においては何といたしても、医業が一番発達している。

そこで宗教においても、道徳を行うものは幸福を得ら

れ、道徳を行わざるものは不幸に陥る、もしくは道徳を行つても幸福を得られざるもの、道徳を行わざるもの反つて幸福なる人あること等の関係を科学的に立証し得れば、どれだけ伝道上便宜であるかわからない。そこでこの道徳学(モラルサイエンス)さえ完全に成功すれば、御教祖は九十歳、前管長公は四十九歳で逝去された理由も、不道徳にして埃多き凡人でも百歳以上の長命をなすものある理由も明らかになつて来るのである。」〔講演筆記1〕二―三ページ

(9) 「講演筆記1」四ページ。

(10) 「講演筆記1」四ページ。

(11) 「この場合は幸福はない」として、その理由を示し、さらに善へと転ずる方法を述べている。「例えば、金銭さえ神仏へ喜捨すれば助かるというて、その使い途が善であるか、悪であるかを確かめないでいるのは、迷信であつて何にもならない。しかし、善であろうと思つて出したものが悪であつても、不足すれば何もならないが、自己反省してタンノウしていけばそれだけの効力はある。」〔講演筆記1〕四―五ページ

(12) 「労働者のあるものが多数のためであるというて盲動するは道徳のようで道徳ではない。また会社の重役が会社または株主のためであると考えてそれに反対するは道徳のようで道徳ではない。要するに双方共に不道徳である

故に幸福はない。」（講演筆記Ⅰ）五ページ）

(13) 「例えば、昔は親を捨てるのが当然でこれが道徳なりし時代もあったが現代文明国においては道徳ではない。また真理と道徳とは一致しない場合がある。例えば、教祖は宇宙の真理を実行せられたけれども、当時の道徳とは一致しなかったために、非常なる迫害と遭遇せられた。先輩の教師もそうである。その後は、時代の変化と共に今日は同じ教祖の教えたる真理を実行しても割合に迫害がないようになった。また、甲の場所で道徳することが、乙の場所では反対に不道徳となることがある。例えば、各民族の風俗習慣等の相違から往々不道徳なことがある。けれども真理は動かすことは出来ないのである。」（講演筆記Ⅰ）六ページ）

(14) 「例えば、金銭を求めざるものは、道徳を行っても金持ちにはならぬ。徳を求めねば、道徳を行っても徳望ある人にはなれぬ。その実例を挙げれば、支那の顔回は、道徳を行つたが、富貴をもとめなかつたがために、終生貧乏であつた。また孔子も富貴を求めなかつたために、陳蔡の野に餓えた。皆自ら求めなかつたのである。けれども、子貢という人は、道徳を行いつつ終生富貴であつた。これは自ら求めたのである。天理教でも、越後の寺泊の藤田旅館などは、御道の精神で道徳を行いつつ営業しておるが、今日は一カ年に一万三千人以上の宿泊人があるという。日本で

も稀である。これ自ら客を求めたのである。」（講演筆記Ⅰ）八ページ）

(15) 「今日まで宗教は仏教でもキリスト教でも皆、甲の原因は乙の結果を生ずると思つておつた。例えば、慈善事業を行えば、直ちに幸福があつて何とかできるよ思つておつたが、実際そうはいかぬ。物理学の法則よりしても、甲の原因は甲の結果を生じ、乙の原因は乙の結果を生じ、それ以外の結果はなきものなり。これ道徳学（モラルサイエンス）の研究によつて明らかになつたのである。例えば、たんのうしたとしても、すべての方面に好結果を生ずるといふことはない。しかし、たんのうすれば健康となり、長命をして、人望を得られるだけは疑いのないことであるが、ただたんのうだけではいかぬ。その上に努力をしなければならぬ。努力すれば財産地位は得られる。その上御恩報じも必要である。報恩と敬神、尊皇、愛国、孝行等、種々あるが、天理教信者はその部属教会があつたために精神の苦痛をとつてもらつたのである。ゆえに、その教会に対しては充分の力を尽くさねばならぬ。またその教会は上級教会に対し同様に尽力する。「御神楽歌に蒔いたる種は皆生える」とあるとおり、自分が村のために努力すれば、村内から自然に尊敬され「人を助けて我が身が助かり」て教会のために金銭を出し、発展をさせた結果は、自分が他日教会を設置したときにまたその通りに信徒が尽く

してくれるのが、天理である。少しも間違いはないのである。」〔講演筆記1〕八一―九ページ〕

(16) 「例えば、天理教教祖のごとく、また支那の孔子のごとく、また教会主の陰徳の実行のごときは、直ちに安心も幸福もない。法然上人、親鸞聖人、日蓮上人等は、皆流罪された。キリストは十字架に、孔子は陳蔡の野に餓え、禊教の教祖は伊豆に流され、天理教教祖は幾度も牢屋に入れられたように、道徳を施したる結果が容易に現れぬのみならず、種々の迫害を受けておる。これは泥水の中に偉大なる真理を実行せんとするからである。すべて各階級を通じて凡俗の人が多数である。凡夫の頭には偉大なる真理は入りにくいものである。宗教以外に例を求めれば、楠正成、佐倉宗五郎等も、同様に偉大なる道徳を施したけれども、ついに悪しき結果に終わった。すべて時代に順応して行くのがよい。それがまた真理の実行である。例えば、

教祖……………真理の実行……………迫害

前管長公……………時代に順応

廣池博士……………真理の実行……………迫害中途より時代に順応す

大平良平……………真理の実行……………迫害〔講演筆記1〕九

一一―ページ〕

(17) 「講演筆記1」一一―ページ。

(18) もともとは「性相学（フレノロジー）骨相学（フィジ

オグノミー）」となっていたものを、本文の内容と整合するように骨相学と性相学の順序を改め、さらにそれぞれの言葉に対応するカタカナ表記を正しい組み合わせに改めた。

(19) 「真理と大勢／世界の大勢は善きこと、悪しきこととあり。真理は常に□□□□故に何でも彼でも大勢に従えば幸福ありと思うは大なる誤りなり。大勢を知ってそれに順応し□真理を実行するものは幸福なり。しかれども真理を実行しても大勢に逆行すれば、遂に滅亡するに至るのである。何となれば世界の大勢は古今東西を通じて恰も行燈から洋燈（ランプ）に、それから電気というように進化してきたが、みなそれぞれ利害がある。

真理は混じりものなきをいう。大勢は大いに混じりものがある。故に、大勢に従って真理を実行して行くのが最善の方法である。しかるに今日の学者はそういうことを知らないから、何でも大勢に従えば善いというのであるが、これでは、例えば、電気は今日世界の大勢ではあるが、漏電の恐れがあつて危険である。また、真理とは天然自然の法則であるから、古今東西を通じて動かぬものであるが、大勢は人間の思想であるから時に動く。

慈悲、犠牲、信行「ママ」は真理であるが故に、古今を通じて動かぬ。道徳は真理に合せざる場合があるが故に、古今東西にありて相違す。例えば、親孝行ということがは真

理であるから古今東西同一であるが、しかるに昔は親を捨てるのが道徳とせし時代があった。今日は親を大切にすることが道徳である。しかしこれは道徳の変化ではない。思想の変化である。故にその思想の及ばざる地方においてはいろいろになっておる。」〔講演筆記一〕二八一—二〇ページ）

（20）「廣池博士の入信動機／私は明治三十年から同四十二年まで十三年間、伊勢の神宮に奉職しておりましたが、その間、仏書も三年間、キリスト教も一年間ほど調査したことがある。しかしいずれも私の理想には合わない。日本の神道なども宗教としては値打ちがないと思っておったがだんだん御道を研究してきた今日は、大いに意義あり価値あることを発見した。その後、ある事情のため二見が浦に住所を転じていたとき神宮皇學館の生徒に天理教の話聞いた。その話に天理教の信徒は阿呆と馬鹿になって通れというて、すべて犠牲の精神をもっておるということを知り、私ははじめて私の理想に叶う宗教だと思ひ、一度教理を聞いてみたいと思つた。なぜなれば仏教でもキリスト教でも、はじめはみな犠牲を生命とおつたが中途から、だんだん欲望が生じ、ついに宗教たる生命、すなわち犠牲の觀念を失つた。それから勢山支教会の部下の人で服部テイ子という講元の人から天理教の教理を聞くことになり（その人の夫は大工であつた）、勢山支教会に紹介を受けその会長にいろいろ話を聞いたが、要するに誠の精神を造

ることが肝要で、病を助くるに誠一つという□、そうして誠の心を造るには、単独布教をするのが一番であると言「わ」れた。そこで多数の難病の人を助けるために自己を犠牲として神様に御願いしたが、みな御守護をいただいた。そこで私は、実に大なることを発見した。大いに科学的に研究しなければならぬと思つた。法律などを研究しておるような小さき問題ではないと思ひ、それから大いに研究した。ここにおいてはじめて誠ということを見出した。自分はもとより敬神の念はもつておつた。ゆえにときどき御守護をいただいたことがあつた。しかし、それまでの信仰は苦勞を自分にして幸福も自分に受けるという世間普通の信仰であつたが、天理教の信仰は自分に苦勞して幸福は人に与えるというのであるから、これが本当の誠である。この真理は今日世界にいかなる学者でも決して求めることは出来ぬ、独り天理教のみである。ここにおいて、私の精神に大革命を起こし、ますます御助けから教理の研究に従事した。

私は本部と關係を持つたための信仰ではなかつた。純粹の信仰であつたが、かつて勢山支教会において甲賀大教会部の青年講習会をやつたときの講演筆記を製本してあつたが、その書物を勢山支教会長から添書を付けて本部に御教示を乞うために送つたことがあつた。その後私は坐骨神經痛を悩み、いかにしても御守護を頂くことが出来ぬので、

本部に参詣し本部員のある御方の御諭しを受けた。そのとき「道と世界の両道をかけておる。一筋に心定めざるるよう」と諭されたので、ゆえに大神様の前に額づいて充分の心定めをなし御願いと、直ちに足痛がやんだ。それから甲賀大教会の詰所に帰ると、詰所の書記をしておる人の言われるには、今度廣池という人が参拝したら、直ちに本部に知らせるようにお話があったということで、直ちに本部にまいり管長公および松村教正に面会した。そのときに□つての書物の話もあった。また管長公の言われるには、本部に引き寄せるとの神意なることを言われた。それから東京に帰りておったが、二月二十五日政府において三教会同の催しがあったが、その後三月二十五日に私が本部に喚(よ)ばれたとき、管長公が座長として柘野「増野」、梅谷、山澤、松村、喜多氏等の本部員の人々が毎夜六時頃から翌朝四時頃まで、私の質問に対していちいち答えをしておられた。次の間には中山家の近親の御方々ばかり、聞いておられた。他の□は、一人もそれを知らない。きわめて秘密に七夜も続いたのであるが、それから二年間、管長公から種々教理の御説明があった。ゆえに天理教の歴史、沿革は全部知っておる。私はそのときかくのごとき催しのあるはこれ天理教の大生命であることを思った。それから三教会同の結果(三教会同と天理教)と書物を出版するについて相談を受けたので、訂正を加えて全国に配布したので

ある。その後、勢山支教会に帰ったが風邪が原因で大病に罹った。だんだん重病に陥るので赤十字病院に入院することになったがますます悪くなるばかりで、死を待つよりほかはない身となった。そこで心定めをして退院したが、時あたかも講演会のために山澤支廳長が本部から出張せらるることになっておったので、そこで本部員の御授けをうけることになったが、山澤先生の御授けは「食物の授け」という。食物の授けとは水の中に砂糖を少量入れてそれに授けをするのであるが、それを頂いたときは真に心の改造が出来ると思ったが果してだんだん御守護を頂いた。そのときの心定めは道一筋になるというのであったが、管長公から直ちに本部に来るようにいわれて松村先生が見舞い方々まいられたのであった。そのことを東京の家族に連絡したところが直ちに家内がまいり、大反対をしたが私の決心は変わらなかった。これは小の虫を殺して大の虫を助けるという宇宙の大原則であるから、致しかたはない。

大正二年一月二十五日日本部に到着したがそのとき管長公からの御話に管長公十七歳のとき教祖に東京に勉強に行くことを乞われたが、そのとき教祖の言われるには学問の要あるときになれば学者が来るから勉強する必要はないと言うて止められたが、今日君が来てくれたのを考えれば教祖の言われたことが真実であったことが初めて明らかになったと言われた。爾来私は今日まで何ら大節なくかつますま

- す健康で通らせて頂いておるが、今後一層徹頭徹尾斯道のため尽瘁するつもりであります、今日の天理教は世界の大勢に順応して行かねばならぬときになってきた。そこで御道も学問の必要があるようになったのである。神様は今日あるを見透して私を十年前に御引き寄せになったことと思えます。ゆえに私は入信以来常に御教理を学究的に研究しておったのでありますが、私にいかにも大智識がありまして、今日たまたま引き寄せられたのでは、時代に順応して行動させて頂くことは出来ませんからであろうと考えます。〔講演筆記1〕三三一―三二六ページ)
- (21) 『日記2』一三三二ページ。
- (22) 『日記2』一三三二ページ。
- (23) 「遺稿」。
- (24) 『日記2』二四〇ページ、大正九年五月三日。
- (25) 『日記2』二四五ページ。
- (26) この内容は、『道徳科学の論文』の第十四章第二十三項「最高道徳における唯心的安心立命」(『論文8』四二二―四三〇ページ)に結実するものと推定される。
- (27) 『日記2』二四八ページ、大正九年五月五日。
- (28) 目次の項は、一、二、三…とした。
- (29) 引用に際して、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改め、また誤記は適宜改めた。節、目等に相当する番号は、(1)、(2)、(3)…(a)、(b)、(c)…とした。

- (30) 「講演筆記2」では、(1)がなく、(2)から始まっている。おそらく直前の抜けた部分に(1)が含まれていたものと思われる。内容的に推定し、「(1)道徳にあらざるもの」とした。
- (31) こども「講演筆記2」では、(a)がなく(b)から始まっている。おそらく直前の抜けた部分に(a)が含まれていたものと思われる。内容的に推定し、「(b)迷信」とした。
- 「御教祖は迷信すべき教えを示されたのではない。その罪は布教者の罪が大なる事と思う」として、教祖の事蹟を述べている。「神憑後五十年という長い間、誠一筋を真の誠として私利私欲を離れ、世界助け人類救済のためである」と、あらゆる艱難の道を通られて、善く模範を示されたのである。要は、私利私欲心があつてしたことは雛形と違ふのである。私利私欲を離れて人々を助ける心が天理に叶い要求せずとも必ず神は幸福を与え給うのである。」さらに、「教理そのものと信仰は違ふ」とし、「信仰」とは「因縁を悟つて、自己反省して徳を積んでいく事」であると説明している。〔講演筆記2〕二二二ページ)
- (32) 今日の科学ではこのような説明は通用しない。科学は常に反証可能性を保持しながら前進していく未完結の知識体系である。ここに示された廣池の証明は、一九二〇年代の時代的制約の中で、当時の最新の研究成果をもって試み

られた説明であると受け止められなければならない。

(33) 廣池富『父廣池千九郎―その愛と家庭生活』(以下、『父廣池千九郎』と略す)三〇七―八ページ。ここに描写されている講義が七月二十二日から二十七日にかけて行われた講習会かどうかは判明しない。

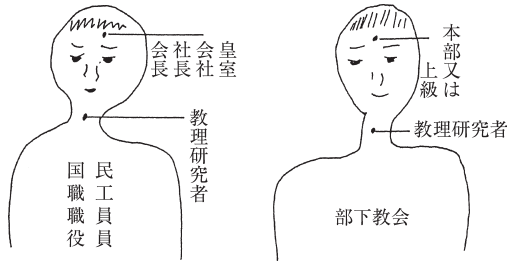
(34) 「遺稿」。

(35) 『日記2』二二六〇ページ。

(36) 天理教の用語である。「親神はその人を救うために試練を与え、その試練を通して反省を促し、人生の正しい道を教え、救済へと導くとされる。つまり、病氣や困難は自己に対する深い反省を促す契機となり、その困難を親神の「手入れ」として感謝して受け止めることによって、救済へと導かれることとなる」とする考え。(モラロジー研究所編『廣池千九郎日記 用語解説』広池学園出版部、一九九四年、四二―ページ)

(37) 「遺稿」、大正九年八月十日推定。

(38) 「遺稿」、大正九年七月二十七日推定。ほかの遺稿にも、これと似た図が描かれている。「頭／のど／体」に対応して、「本部又は上級／教理研究者／部下教会」、「皇室、会社社長、会長／教理研究者／国民、職工、職員、役員」といった言葉が記された図もある。



(39) 「遺稿」。

(40) 「遺稿」。

(41) 「遺稿」。

(42) 『論文9』三三八―四〇ページ。

(43) 『論文9』三三一―二ページ。

(44) これは明治四十五年一月四日以来、十二年四か月に亘

る研究・実践の成果であった。実際には、このあとすぐに付箋が付けられて廣池のもとに戻され、何度も書き直しを重ね、大正十五年一月二十六日午後三時に、「管長公宅にて、管長公、御母堂、松村幹事の御三名に御面談。天理教の教理につき、約一時間に亘り御意見を申し上げ」(『日記3』一六五ページ)と記されているのが、教理に関する最終報告であったと思われる。

(45) 『日記3』一〇六ページ。

(46) 『日記3』一〇七ページ。

(47) 『日記3』一五〇―一ページ。

(48) 『復刻版廣池千九郎モラロジー選集3』(以下、『選集3』と略す)モラロジー研究所、一九七六年、三〇三ページ。

(49) 『選集3』三五五―五九ページ。「モラロジーの精神伝統」に関しては、井出元教授による精緻な研究が発表されている(井出元『廣池千九郎の思想と生涯』広池学園出版部、一九九八年、二八七―九三ページ)。

(50) 『選集3』三四六。

(51) 『選集3』三五七。

(52) 『日記2』二六一ページ。

(53) 『日記2』二六三ページ。

(54) 『日記2』二六四ページ。二〇〇五年度の「学校保健統計調査」によると、十一歳の平均体重が三十九・一キロ

グラムで、十二歳の平均体重が四十四・九キログラムである。廣池の「十一貫五百」は、四十三キログラムであるからこの間の値ということになる。

(55) 『日記2』二五八ページ。

(56) 『日記2』二六三ページ。

(57) 「遺稿」(『苦勞の話』、大正九年八月十八日)。

(58) 『論文8』、三〇七―一四ページ。この部分の結論としては、「最高道徳においては、自己の保存及び発達のため、すなわち利己のための苦勞の必要を認むると同時に、更にその上に神の心に一致する愛他的苦勞を要求するのであります。すなわち最高道徳における真の苦勞は、その動機・目的及び方法ともに人心の開発もしくは救済のために、自己の精神的及び物質的犠牲を払うことであるのです。この故にその自然の結果として、因習的道徳とはその方法は同じきところもあるも、その動機及び目的に至ってはことごとく違うのですから、その苦勞が尊く、且つ自己の真の品性を形成するに役立つのであります」(二一四ページ)と述べられている。

(59) 『日記2』二六二ページ。

(60) 廣池富『父廣池千九郎——その愛と家庭生活——』(以下、『父廣池千九郎』と略す)広池学園出版部、一九八六年、二〇五ページ。

(61) 『研究ノート12』二八四、二八八、三三八ページ。

- (62) 『研究ノート12』三三八ページ。
 (63) 『研究ノート12』二八六ページ。
 (64) 『研究ノート12』二八九ページ。
 (65) 『父廣池千九郎』三〇六ページ。
 (66) 中西史郎『片山好造私史』、二七八ページ。一九九九年八月二日から二日に愛知県の稲沢モラロジー事務所に出講したとき、この「コンコ」という言葉をご存知のご婦人から、「たくわん」のことですと教えていただいた。
 (67) 『研究ノート12』二八六ページ。
 (68) 『父廣池千九郎』三〇八ページ。
 (69) 『父廣池千九郎』三〇九ページ。
 (70) 『父廣池千九郎』三一―一ページ。
 (71) 『父廣池千九郎』三一〇―一―一ページ。
 (72) 『日記2』二六八ページ。「十一月」十一日、夜午前三時半、息とまる。七月より軽し。」

*本稿の草稿に目を通していただき、貴重なコメントをいただきました。麗澤大学外国語学部教授・学長補佐、モラロジー研究所の廣池千九郎記念館副館長・道徳科学研究センター廣池千九郎研究室室長である、井出元教授に感謝いたします。

*訂正——「廣池千九郎と天理教本島支教会(二)」(『モラロジー研究』58号、二〇〇六〔平成十八〕年九月、一〇二ページ)の表にある「大正一一年二月六日から三月二日 四五日間 『日記3』五―一〇ページ」を「大正一一年二月六日から二二日 一七日間 『日記3』五―六ページ」と訂正させていただきます。